

## Epiphanies その瞬間

### No.6

## 知識に縛られない柔軟性



植物栄養・肥科学研究室

藤原 徹 教授

Toru Fujiwara

**私**が植物に魅せられたのは子供の頃からです。小学校3年のときには団地の空き地を耕し、ジャガイモの栽培もしました。放置したジャガイモから出た芽を切って植えれば、ちゃんとジャガイモが生育するという話を聞き、これは自分の手で試さなくてはと思ったのです。とにかく植物を育てることが好きで、しかも対象はなぜか、食べられる植物に限られました。

ですから、東大進学後、穀類や野菜など人が畑で作る植物を扱う農学部を選んだのは自然な成り行きでした。そして「せっかく作るなら、もっと栄養に優れ、美味しく育てる方法はないか」と考えたわけです。

私の研究生活における転機は、さまざまな遺伝子実験を指導してくださった理学部の内藤哲先生（現・北海道大学教授）の「気づき」とともに訪れました。内藤先生の研究室がシロイヌナズナの変異株を見つけたのです。自分の研究領域とは異なるにもかかわらず、内藤先生は「藤原の研究に関係するのでは」と直感し、すぐに連絡をくれました。これが生物としては初めてのホウ素の輸送体の発見へ

とつながりました。

研究というのは、どこに、どんなかたちで転がって行くか分からない一面があります。だから面白いし、どこに転がれば新たな展開が見えてくるのか、そこを見抜くことが重要になってきます。些細なことへの気づきや、予期せぬことへの驚きや関心が可能性の扉をこじ開けます。私のその後の研究の道は、内藤先生の「気づき」をきっかけに大きく広がったと言っても過言ではありません。

ある特定の分野の研究を続けていると、どうしても従来の知識を前提に判断しがちになり、思い込みや先入観も生まれます。もちろん、人間が営々と積み重ねてきた知見の集積である知識は重要です。しかし、過去の知見がすべて正しいとは限りません。知見の集積からは導き出せない地平に新しい発見も存在します。知識に縛られない柔軟な視点や発想を持ち続けていれば、研究はいくつになっても楽しく、そこには未知への可能性が広がっているはずです。



スイスで開催された植物の硫黄栄養の会議にて(1998)